

主体的に学びへ向かい、自らの考えを表現できる児童生徒の育成
～職員同士の対話による個別最適な研修と協働的な研修の一体的な充実を通して～

1 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

令和4年度の中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、多様な子どもたちへの個別最適な学びと協働的な学びの提供が主要なテーマとなっており、児童生徒だけでなく、教職員も自ら課題を設定し、その課題解決に向け主体的、協働的に学び合う研修が求められている。また、「新たな教師の学びの姿」の実現として、次のようなことが挙げられている。

- ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- ・求められている知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- ・新たな領域の専門性を身につけるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- ・他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

このことから、自己の崇高な使命のために絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努める姿として、教師自ら主体的に学びに向かうことが重要であるといえる。

(2) 本校の教育目標および目指すべき児童生徒像から

令和7年度の本校の教育目標及び育てたい資質・能力は次の通りである。

教育目標

ふるさとに誇りを持ち、自ら学び、心豊かでともに高め合う児童生徒の育成

育てたい資質・能力

- 実践力：自ら考え、自ら学び、行動する力
- 表現力：ともに高め合い、表現する力
- 郷土愛：郷土を愛する豊かな心

(3) 本校の児童生徒の実態から

それぞれの学力調査の結果は全体的には県平均を上回っていたが、共通して「読解力」に課題が見られる。また、普段の学校生活においても、「自ら考え判断し、主体的に取り組むことが苦手」「発表する子どもが固定化されている」「考えは持っているものの、それを表現できない（しようとしない）」などが課題となっている。「学びの主体」は児童生徒であることをもう一度全教職員で共通理解し、基礎・基本の徹底による学力の保障とともに、そこから生まれるであろう達成感や知的好奇心を次の学びにつなげていくことで、学びへの意欲を高め「主体的な学び」や「表現力の向上」につなげていくようにする。さらに、義務教育学校としての強みを生かす点として、各ステージでの授業力向上や家庭学習等の学び方の系統性を踏まえた円滑な接続にも力を入れていく

い。

(1)～(3)の理由から、本校の研究主題を「主体的に学びへ向かい、自らの考えを表現できる児童生徒の育成～職員同士の対話による個別最適な研修と協働的な研修の一体的な充実を通して～」と設定した。教師が受け身の姿勢で知識・技能を吸収していく形の研修ではなく、個々が自ら課題を立てて、実践を行い、それを振り返り、協働的に学び合う研修を通して、さらによりよい授業実践につなげられるようにしていく。

2 研究の実際

(1) 個人の研究テーマの設定

本年度の研究テーマ設定では、まず教職員一人一人が、本校の学校教育目標および育成を目指す資質・能力のために、自分はどんな授業を作り、どのように子ども達と関わることができるかという、日々の教育活動への願いを言葉にすることから始めた。次に、自分の実践を振り返り、その「願い」をより高いレベルで実現するために「さらにどこを伸ばしていけるか」という課題について考えた。こうして見つけた課題を基に研究テーマを設定することで、教職員がお互いに高め合いながら学校全体の教育の質を向上させていくことを目指した。(図1)

初めての取組ということもあり、当初は悩んでいる教職員も多かった。設定した研究テーマでは、前期課程の教職員は日頃の授業の中で、「表現力」や「主体的で協働的な学び」などを高めていくようなものが多く見られた。後期課程の教職員は、各教科の専門性を高めるようなものがあった。養護教諭や栄養教諭も、学校教育目標に向けて取り組みたいことを基にテーマの設定を行った。自分で研究テーマを設定したため、各教職員が「自分ごと」として課題を捉え直す機会となった。

設定された各研究テーマの実現に向けて、年間を通して計画的に研修と実践に取り組んだ。

(2) 校内研修の実際

ア 講義型から実践対話型への転換

従来の知識伝達を中心とした講義形式の研修を、「いかに自分の授業に活用できるか」という視点に焦点を当てた研修になるよう工夫した。事前に資料を配付したり、内容を公開したりして全体の時間を短くして、個やグループの時間を確保し、より長い対話の時間を

研究テーマ
発展的な内容への取り組み方
自分の考えを分かりやすくまとめる表現力の育成と場の工夫
科学的な思考を育てる考察とまとめ
個の力を伸ばすために、教師に必要なスキルとは？
児童自ら課題を解決していく生活科の授業実践 ～児童同士の主体的対話を中心とした協働的な学び合いを通して～
自分が伝えたいことを根拠や理由をもとに表現することのできる学習活動の工夫
主体的・対話的で深い学びの学習について
一人ひとりが自分の考えを持ち、表現できる学習活動の工夫
音楽的な要素を根拠にして表現する力を高める授業づくり
造形美の要素や構成方法を作品から読み取り制作に活かす学習活動の工夫
課題解決ができる集団を目指した自己指導能力の育成 ～「関係の質を高める」学級経営の工夫～ 豊かにかかわりあい主体的に運動に取り組む生徒の育成 ～個に応じた指導と協働学習の工夫～
英語における「読む力」を高める指導の工夫
根拠に基づいた表現活動の指導のあり方
科学的に探究する態度を育てる授業づくり
自己理解を深め、課題意識を引き出す教材教員の工夫
学習したことを生活につなげ、実行することができる指導・支援、授業づくり
個に応じた保健指導のあり方
児童の興味・関心を生かし身に付けたい力を伸ばす生活単元学習づくり
さまざまな活動を通して場に応じた言動を意識することができる指導・支援
一人ひとりを生かす評価
場に応じた言動について、重要性の気づきと意識を高める指導・支援の工夫
健康相談における必要なコミュニケーションの工夫
主体的で対話的な食に関する指導の実施（ICTを活用した個別最適化食育の実践）

図1 教職員が立てた研究テーマ一覧



図2 教職員の対話の様子

設定した。この対話の場では、単なる意見交換で終わらせず、具体的な授業展開のアイデアや、予想される課題、効果的な指導法について、多角的な視点から話し合いを重ねた。(図2)特に本校は、9学年の児童生徒が在籍しており、学級担任だけでなく教科担当や専科等に関わる機会が多いことから、より幅広い視点で対話を進めることができた。この対話を中心とした研修の進め方により、教職員一人一人の「学びを実践に繋げる力」を高めるきっかけとなった。

イ ICTの活用について

より多角的で実りある対話を実現するため、ICTツールを効果的に活用した。特に、従来のグループワークにおける「意見の埋没」という課題を克服し、すべての教職員のアイデアや気づきを研修全体で共有することに重点を置いた。これまでの研修では、グループ内での話し合いの結果を発表者が代表して報告する形式が中心であった。この方法では、発表機会の偏りや、議論の中で発言に至らなかった質の高い意見が埋もれてしまうという課題があった。そこで、以下のように教職員一人一人の思考プロセスと意見を、研修の場で即座に可視化し、共有できる仕組みを取り入れた。

(ア) リアルタイムな振り返りの共有

校内研修内で話し合ったことを基に書いた「振り返り」を、デジタルフォームに入力する形式を取り入れた。これにより、入力された意見が瞬時にスプレッドシートに集約・出力され、全ての教職員の考察や反省点をお互いがリアルタイムで閲覧・共有し、深めることができるようになった。(図3)

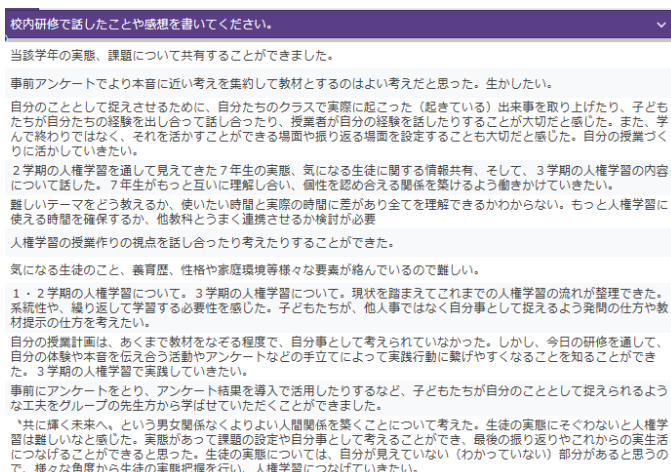


図3 教職員の振り返り

(イ) 対話の活性化と思考の深化

短時間での意見収集・集約には、意見を入力できるツールを活用した。特定のテーマや問いに対し、全員が意見を入力すると、共通性の高いキーワードが巨大な文字としてモニターに映し出される。これにより、議論の焦点が明確になり、「多くの教職員が考えていること」を瞬時に把握でき、その後の対話や議論をより具体的かつ効果的に深めていくことが可能となった。

ウ カリキュラム・マネジメントの推進

毎年、生活科・総合的な学習の時間を中心とした各学年の単元配列表を作成している。それを

基に、年度当初の校内研修の時間を利用して、単元配列表を作成した。図4は、その時の様子である。育成すべき資質・能力にむけて、各教科や単元がどのように関連していくかを探るべく、児童生徒の探求的な学びや社会との関わりを育む中核となる「生活科・総合的な学習の時間」を中心として、矢印で結んだり、付箋を貼ったりして、全学年の年間指導計画を詳細に分析した。指導内容の俯瞰や関連性の明



図4 単元配列表作成の様子

確化だけでなく、教職員自身の研究テーマと照らし合わせ、今後の取組の見通しを持たせるための時間となった。自分の研究テーマの実践が、学校のどの学年のどの単元で効果的に実践できるか、その実践のタイミングなど、対話を通して相談しあい、見通しを持つことができた。

エ SMILE 会の設定

「SMILE」とは、「Study Meeting for Improving the Learning & Education」を略称した造語である。校内研修の各回の後半の時間に設定し、職員が研究テーマに取り組む上で心理的安心感を得られる場を確保した。「困り事」や「実践の悩み」などを様々な立場や教科、年代を超えたグループの中で率直に共有し、各職員が研究テーマにむけて実践に繋げたり、アイデアを創出したりするきっかけの時間となった。

3 授業実践の例

(1) 2年生「生活科」

ア 研究テーマの設定について

児童自ら課題を解決していく生活科の授業の実践
～児童同士の主体的で対話を中心とした協働的な学び合いを通して～

イ テーマ設定の理由

本校の研究テーマである「主体的に学びに向かう」「自分の考えを表現する」児童生徒の姿という目標に対して、第2学年という発達段階において「課題を自ら発見し、自分達で協働的に解決しようとする姿」を理想像とした。グループ分けや学びの進め方などを教師主導で行うのではなく、児童自ら選択することができる授業デザインを継続することで、児童の主体性を高めることができ、個別最適な学びの実現にも近づくと考えた。

ウ 視点と学習活動の工夫について

- 視点1 児童自ら課題を設定することができるための工夫
- 視点2 主体的な学びを誘発するための授業形態の工夫
- 視点3 対話を中心とした協働的な学びを促進させるための工夫

視点	具体的な学習活動の工夫	目指す児童像
①	<ul style="list-style-type: none"> ・一年生を『おもちゃランド』に招待するという単元目標を設定する。 ・お互いの遊びを比べ、試す場を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標に向けて、自分達の遊びやおもちゃにどのような課題があるのかを考える児童
②	<ul style="list-style-type: none"> ・作りたいものやグループ分けを自分達で決められるようにする。 ・友達との意見交流や、工夫を実際に試すなど、学習の進め方を選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の理想に対して、自分の学び方を選び、取り組む児童 ・友達と比べて、もっと遊びが楽しくなるために自ら考える児童
③	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの枠を越えて対話が自由に行える場を設ける。 ・他のグループの課題や良いところの見える化を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びをよりよくするための意見交流や助言を自由に行う児童 ・自分の課題や良い点を他グループと比べながら学び合う児童

エ 授業実践を通じた成果 (○) と課題 (▼)

○教師主導でなく児童が主体となることで、失敗したり困ったりする体験を通して課題に気づき、気づきの質が向上した。(図6)

▼グループや役割などの決め方において、児童が好きに決めるのではなく、教師がある程度先導した方が、学び合いがより深まるように感じた。



図5 対話を通して課題解決をしている様子

(2) 7年生「音楽科」

ア 研究テーマの設定について

音楽的な要素を根拠にして表現する力を高める授業実践

イ テーマ設定の理由

音楽科の授業での合唱や合奏、鑑賞の表現活動において、児童生徒が自分の内面にある感じたことを表出させるためには、音楽を形作っている要素と自分の感情とのつながりを意識させることが大切である。そこで、音の強弱、速度、音色、リズムなどの要素を手がかりに、児童生徒が自ら自分の感情を整理し、豊かな表現活動ができるように、個人研究テーマを設定した。

ウ 視点と学習活動の工夫について

視点1 楽曲のイメージを共有する時間の設定

視点2 感じたことを言語化・視覚化する活動の充実

視点	具体的な学習活動の工夫		目指す生徒像
①	・小集団による対話を中心に、自分の考えを伝え合う活動の時間を確保する。	➔	・自分の考えを伝えるとともに、相手の意見を肯定的に受け止める生徒 ・共有した考えをもとに歌唱の表現を工夫することができる生徒
②	・自分が感じたことを、音楽的な要素に細分化して伝える。 ・タブレットの共有機能を用いて、多様な意見に触れる。		・自分の気持ちや感じたことを音楽的な要素を使って表現することができる生徒 ・多様な意見から自分の考えを広げたり、深めたりすることができる生徒

エ 授業実践を通じた成果（○）と課題（▼）

○タブレットを活用したことで、普段は意見の表出が少ない生徒も考えを入力することができ、共有する活動に取り組むことができた。（図7）

▼音楽の鑑賞を通して知覚・感受したことを、音楽的な要素に基づいて表現することに、個人差が見られた。



図7 タブレットを活用して意見共有する様子

4 全体を通じた成果（○）と課題（▼）

これまでにない形の校内研修は、「正解のない問い」に向き合い続ける試行錯誤の連続だった。「研修を企画・運営する側」と「実際に研修に取り組む側」双方の想いを集約し、一つの方向へと編み上げるなど、さまざまな苦労を通して、本校の研修スタイルを形作ることができたといえる。そのような本年度の校内研修を振り返り、一年間の成果と課題をまとめる。

○全教職員が研究テーマを「自分ごと」として捉え、主体的に実践と改善のサイクルを回すことができた。

○従来の受動的な研修スタイルを刷新することで、授業実践に対する具体的な改善について共有し、実践に結びつけることができた。

○ICTを活用することで、一人一人の意見を可視化し、共有することができた。

▼研修の枠組みが確立していなかったため、多忙感の中で一年間を見通して実践を進めることに困難を感じた教職員も見受けられた。いかに無理なく、継続できる仕組みにするか、という持続可能な研修デザインの構築をしていく必要がある。

▼先行事例の紹介や参考資料の提示などが十分とは言えず、研修に一貫性がなかったといえる。次年度は、教職員がより迷いなく研究を進めることができるよう、伴走支援の質的向上とリソースの充実を図る必要がある。

今年度の課題をふまえ、今後の校内研修が更に充実したものにできるよう、来年度も継続して取組を進めていきたい。